

魚と人を繋ぎ直す

有限会社 三陸とれたて市場 代表取締役
八木健一郎 さん
 【岩手県】



くらし

食を
守る

震災以前のこと

生まれも育ちも静岡。大学2年の時、キャンパスが三陸町（現在の大船渡市三陸町）にあったので移り住みました。魚の現場に入ってみて凄さや旨さなど驚く事がたくさんあって、消費者の感覚としてマーケットと繋がるんじゃないかと思ってホームページを作るアルバイトをして、卒業後に「三陸とれたて市場」を立ち上げました。船にライブカメラをつけて、浜の物語のような事をインターネットで発信し、魚と人を繋ぎ直すような事をやっていました。

震災から現在

震災の日はスタッフ全員が社内で作業をしていました。凄く大きな揺れがあって、津波が来るんじゃないかと、皆で海拔300メートルほどの山の上まで坂道を登りました。頂上まで行ったものの、しばらく経って町の状況が全く分からないからと山から下りたら、町がまるきり消えていました。もの凄いい事が起こったのは認識出来るけれど、何が起こったのか理解出来ない状況でした。30分ほど前までいた会社も町も、がれきの山になっていたんです。

避難所で一晩明かして翌日、作業をしていた浜の方まで行きました。がれきが溢れていて、一体どこから片づければいいんだと途方に暮れましたね。自分たちで片付けを始め、人的な被害の規模が見えてきたのが地震から3日目ぐらいでした。

それから少し経って漁業者の方に被害の状況を確認しました。何が残っているのか、がれきがどうなっているのか、出来る漁業であるのかって。どうすれば最短で立ち上がっていくのか。避難所の前にテントが張ってあったんですけど、そこで焚火をしながら皆で意見を交わして励まし合っていました。

そんな中、4月11日に岩手県が復興宣言をするという情報が入りました。その日に合わせて漁が出来ないか。宅配便も止まっている、伝票だつてない、本当に何も無い。でも、何とかしたい。出荷出来る方法を模索しました。そして4月11日、船を海に出しました。皆にあきらめムードを漂わせなくなかった。海が減多打ちにされて皆が諦めた環境になっていて漁業なんていう中で、誰かが走っていないかと、メンモシした空気の中で皆が暗くなっていってしまうと思っただけです。

なんと、その日は大漁でした。そしてその日の出来事をきっかけに、漁業者は少しずつ元を取り戻しました。振り返ってみると、馬鹿な事をしたと思います。でも、一刻も早く灯を掲げて、皆の視点を荒れ果てた陸地から海の方に切り替えてもらわなきゃと思っていました。

震災前、三陸の番屋で僕たちに色々な事を教えてくれた、牡蠣剥きのおばあちゃんがいたんです。番屋は流されてしまったけれど、そのおばあちゃんに何とかもう一度牡蠣剥きをさせたいという思いで「浜のミサンガ環（たまき）」というミサンガ作りにも取り組みました。最終的には300人弱の女性が参画してくれて、18万2千本を販売しました。不特定多数を何とかしようという話じゃなくて、おばあちゃんを海に戻したい。おばあちゃんに戻るって事は、他の人も戻れるよね、という風に広がったんですね。

将来のビジョン

自分たちが三陸の町の中で作ってきた漁業者との関係を、少し離れた場所の漁業者たちとも同じ構造で作ってみて、その漁業者たちが得意とするものがもっと消費の現場を喜ばせるようなツールに出来ないかと考えています。少しずつですが、構造を広げていきたいですね。

八木健一郎さん

大学時代に初めて三陸地域にやってきた八木さんは、漁師さんたちと新たな試みを次々と実施しながら魚を売ってきました。まだBtoCなどは空想もつかない頃に、船上でライブカメラを使って販売したり、京王プラザホテルと組んで食材を開発したりしてきた。震災後は同じレベルを敷き直すのではなく、新たにレベルを敷き直すことが復興だという八木さんに、新たな日本の水産業について語っていただく。



中高校生へのメッセージ

等身大っていうのが、肩肘を張りずに裸の自分とお互いがぶつかり合える時こそ、素晴らしい物が出来上がってきます。無垢な事の大切さですわ。ミサンガがまさにそうでした。子どもの時に持っている無垢な感性を消さないで自分を信じてください。